

# 小学校高学年における教科としての「外国語科」の授業づくり

—主体的・対話的で深い学びの実現に向けて—

鳴門教育大学大学院教育研究科 指導教官 畑江 美佳  
高知県立香南市立野市小学校 教諭 市川 理絵

## 1 はじめに

2014年度に文部科学省（2015）が実施した『小学校外国語活動実施状況調査』によると、小学校5・6年生では、外国語活動に対して肯定的に捉えている児童の割合の方が多いたことが分かっている。しかし、同調査が中学生に対して実施している回答を見てみると、学年が上がるにつれて英語に対する肯定感が低くなっていることが分かった。2016年度に文部科学省（2017a）が全国の中学3年生約6万人（国公立約600校）を対象として実施した『英語教育改善のための英語力調査 速報版』によると、「聞くこと」「話すこと」のテストスコアが高いほど、「小学校のときに英語が好きだと思っていた」生徒の割合が高いことが分かり、学習への興味・関心及び意欲と学力とに関係があると推測できる。また、外国語に関わらず、子供たちの現状と課題として、「子供たちの学力については近年改善傾向にある。（中略）一方、学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを生活や社会の課題解決に生かしていくという面に課題がある。」（文部科学省，2017c）と言われている。

また、今回の学習指導要領改訂により、育成すべき資質・能力として「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」があげられた。子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができるようにすることが求められている。そのために教師は、学びの質を重視した改善を図ることが求められ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取り組みの活性化が重要であるとされている（文部科学省，2017b）。

以上のことを踏まえ、教科としての外国語科の授業が、児童の学習意欲の維持・向上を図りながら「主体的・対話的で深い学び」となるにはどうすればよいのか、調査・研究する必要があると考えた。

## 2 研究の目的

本研究の目的は、2020年度から教科となる小学校高学年における外国語教育について、「主体的・対話的で深い学び」のある学習内容の開発と、その効果の検証を行うことにある。

## 3 研究内容

### (1) 先行研究の概観

#### ア 主体的・対話的で深い学びの実現に関して

文部科学省（2017b）では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、学習・指導の過程における改善充実のための要点が教科ごとに述べられている。外国語教育においては、「学びの過程を、相互に関連を図りつつ、改善・充実を図ることが必要である。そのような過程で外国語によるコミュニケーションを通じて、自分の思いや考えが深まったり更新されたりすることを児童生徒が認識し、自信を持つことができるような学習活動を設けることが重要である。」とされる（文部科学省2017b）。

また、文部科学省（2017a）の中では、主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を

進めるに当たり、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」であるとしている。そして、その中でも、小学校における外国語教育においては、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉える」点を重視すべき（文部科学省 2017c）としている。学習者自身が社会や世界との関わりを感じながら学習することが求められている点に注目したい。

#### イ 高学年の児童の発達段階

ピアジェの思考発達段階説によると、高学年は「形式的操作期」にあたり、形式的、抽象的操作が可能になるとされている。このことを踏まえ、樋口・金森・国方（2005）は、「高学年は、知的発達の目覚しい時期である。」と述べている。さらに「自分の意見や主張を持ち、自分を客観的に評価することができ、興味・関心も身の回りから世界へと広がっている。また、他教科でかなり知識を学習しており、社会生活でも様々な体験を重ねている。英語活動においても、それらの知識や体験を利用した、児童の知的好奇心を満たすような内容で、かつ達成感が得られるような活動を工夫することが必要である」としている。

また、エリス（1988）は、10代の思春期児になるとメタ認知能力（meta awareness）が出現し、第一言語とその他の言語とを識別できるようになるという。これにより、思春期児は、音声面は10代前の子供には及ばないが、意識的な学習をするという面で勝っており、メタ認知能力が学習効率をあげる助けとなり、言語を「聞き覚える」ばかりでなく、意識的な学習で第二言語習得のプロセスを補強できるとみなされている。

社会性の面では、対人関係に占める仲間（友達）の比重が増加するとともに、ともに過ごしたい相手が場面によって変化するなど、対人関係の枠組みが多様化する。特に、友達に対して精神的共感を求めるようになる（藤村，2005）。これは、後に述べる動機付けとも関係してくるため、高学年の発達段階として考慮したい点である。

#### ウ 高学年の児童の外国語学習への動機付けを高める手立て

岡・金森（2007）は、EFL（English as a Foreign language）の教室においてとりわけ重要な変数は、動機付け（motivation）になるとし、いかに児童のやる気を高め、それを維持するかは非常に重大で、教師としての研究と工夫が求められるところである。と述べたうえで、子供たちのやる気を高めるための指導の基本と留意ポイントを次のように述べている。

- ・「できた」「わかった」をたくさん経験させる
- ・全員が参加できる活動を行う
- ・発達段階に合った活動を行う

高学年になるにつれて知的好奇心をくすぐるような内容が必要になってくるのだが、一方で、難しくなりすぎない注意も必要である。子供の発達段階を配慮し、どこまでが実施可能なのかを見極めることも大切であるとする（岡・金森 2007）。

また、岡・金森（2007）は、ヴィゴツキーの発達論の観点から、次のように述べている。小学校外国語教育に有益と考えられるのは、最近接領域（Zone of Proximal Development）という考え方である。子供の発達を、ピアジェがひとりの子供を通して考察しようとしたのに対し、ヴィゴツキーは、他者との関わり（共同体）の中でとらえようとした。小学校の現場では、どちらの視点も非常に重要だが、ヴィゴツキーの発達観は、英語活動の内容を検討する際に、発達段階に合った指導だけでなく、子供とのやりとりを通して能力を引き出す工夫も必要であるということを教えてくれる。

そして、先にも述べたとおり、高学年の児童の社会性の面での発達に伴い、友達に対して精神的共感を求めるようになる。この点については、清水・橘川（2009）や安達（2009）の小学校高学

年における学習意欲に影響を及ぼす要因の研究結果からも、それを示すような結果が得られている。そのため、学習に際しては学習内容の工夫だけでなく、学習集団としての規範作りや仲間作りの面からもアプローチしていく必要があると考える。

## (2) 調査

### ア 調査目的

本調査の目的は、小学校高学年の外国語単元において、児童の学びが主体的・対話的で深い学びとなるために、他教科の内容や異文化的な事柄を取り入れた授業開発を行い、児童の外国語学習に対する意欲についての効果を検証することである。

### イ 調査方法

#### (ア) 調査対象と実施時期

対象児：高知県香南市立野市小学校第6学年4クラスの児童105名

実践及び調査時期：2017年9月7日～10月6日 各クラス全5回（45分×5コマ）の指導

#### (イ) 調査の方法と内容

本調査では、次期学習指導要領の内容に即した教科としての外国語科の授業を開発し、授業実践を行った。実践と同時に、事前と事後のアンケート調査の実施、及び毎時間の振り返りカードの記入を取り入れ、その内容から児童の外国語学習に対する意欲や態度の変容を調査した。アンケートは、児童の外国語学習に対する情意面を問うものである。今回開発した授業内容の効果を見るため、使用するアンケートの内容は、事前と事後とで同一のものとした。

### ウ 授業実践

#### (ア) 単元の概要

単元名 「自分の誕生日を紹介しよう」 When is your birthday? (『Hi, friends!2』Lesson2)

単元の目標

##### 【知識・技能】

自分の誕生日を言ったり、相手に誕生日を尋ねたりすることができる。また、英語での日付の書き方が分かり、自分の誕生日を書くことができる。

##### 【思考力・判断力・表現力等】

誕生日の言い方や尋ね方が分かり、お互いの誕生日について感想を交えながら伝え合う。また、自分の誕生日を丁寧になぞり書きしたり、例を参考にして書いたりすることができる。

##### 【学びに向かう力・人間性等】

他者に配慮しながら、自分の誕生日について伝え合おうとする。また、世界には様々な行事や記念日があることを知り、日本との違いや共通点に気づくことができる。

単元の指導計画

単元の指導計画は、表1のとおりである。授業は5時間の授業時数で構成することとした。

表1 指導計画

時間	目標
1	・英語での月の言い方が分かる。 ・世界の様々な行事や記念日について興味を持ち、日本との違いや共通点に気づくことができる。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容を知り、単元の目標を決めて活動の見直しをもつことができる。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語での日にちの言い方が分かる。</li> <li>・月の言い方に慣れ親しみ、自分の誕生日を言うことができる。</li> <li>・世界の様々な行事や記念日について興味を持ち、日本との違いや共通点に気づくことができる。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誕生日を尋ねる時の言い方が分かる。誕生日の尋ね方や答え方に慣れ親しみ、友達に尋ねたり答えたりできる。</li> <li>・自分の誕生日を書くことができる。</li> <li>・世界の様々な行事や記念日について興味を持ち、日本との違いや共通点に気づくことができる。</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達に紹介するための準備をすることができる。</li> <li>・世界の様々な行事や記念日について興味を持ち、日本との違いや共通点に気づくことができる。</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と誕生日について紹介し合うことができる。</li> <li>・世界の様々な行事や記念日について興味を持ち、日本との違いや共通点に気づくことができる。</li> </ul>

#### (イ) 展開の工夫

主体的・対話的で深い学びを実現するために、表2のような工夫を行った。

表2 展開の工夫

工夫	主な内容
相手の設定	友達やALT
目的の設定	友達と、自分の誕生日やその日に関する行事や出来事を紹介し合い、お互いのことについてもっと詳しく知り合う。
他教科の内容を取り入れる	他教科での知識を生かせるよう、スモールトークや日本と外国、及び日本語と英語の比較をする活動の中で、社会科や国語科の内容と関連した事柄を取り入れる。
異文化的な事柄を取り入れる	ALTによるスモールトークなどを通して、外国の様子や年中行事などについて知らせ、日本と外国の違いや共通点に気づかせる。
日本や日本語と比較する	外国の行事や英語について学習する際、日本の行事や日本語と比較をさせる。
ICT機器の活用	自分の誕生日の出来事について、インターネットを使い各自で調べさせる。
自己決定させる	紹介する記念日、調べたことや聞いたことに対する感想などは、集めた情報から各自で選択して話させる。
自己評価させる	本単元の学習における目標を、単元のはじめに児童と一緒に設定し、最終時にどの程度達成できたかについて、児童に自己評価をさせる。 毎時間、学習についての振り返りを行う。
活動形態	個人活動やペア活動など、様々な活動形態を取り入れ、児童がより多くの友達と発話したり交流したりすることができるようにする。

#### エ 調査結果と考察

##### (ア) 毎時間の児童の感想より

授業の終わりに子供たちが振り返りカードに記入した自由記述の感想を、授業時間ごとに IBM SPSS Text Analytics for Surveys Ver. 4.0.1 を用いてカテゴリー化し、その関連性を分析した。

それを見てみると、授業で目標としていた事柄に関する語彙や語彙の結びつきが多く、ほとんどの児童が「(自分は本時間の目標を) 達成できた」と評価していることがわかった。また、それ以外に見られる語彙からは、児童の抱えている難しさや気づき、思考の広がりなどについて読み取ることができた。

(イ) 事前・事後のアンケートより

調査結果については対応のある  $t$  検定を施した。

「授業及び授業の中で行われる主な活動への好意性」について表 3 を見てみると、全 4 項目の内、「英語が好きだ」( $t(93) = -.62, n. s.$ ) の項目は有意差が認められなかったが、事前調査の時点ですでに高い平均値であった。「英語で先生や友達の話聞くことは楽しい」( $t(92) = -3.81, p = .00$ )、「英語で自分のことや調べたことを話すことは楽しい」( $t(93) = -3.47, p < .01$ )、「英語で友達と会話をするのは楽しい」( $t(91) = -2.45, p < .05$ ) の 3 項目は有意差が見られた。このことより、ALT によるスモールトークと友達との交流活動が、英語を聞くことや話すことに対する好意性を高めたのではないかということがいえる。本調査における授業実践は、これまで児童が行ってきた「慣れ親しむこと」を目標とした外国語活動とは違い、書くことや自分の誕生日についての語彙の定着を求めるものであった。学習活動に負荷をかけたにもかかわらず、上記の 3 項目において有意差がみられたということは、今回の実践授業が子供たちに受け入れられたということではないだろうか。

表 3 授業及び授業の中で行われる主な活動への好意性

質 問	事前			事後			$t$	$df$	$p$
	$N$	$M$	$SD$	$N$	$M$	$SD$			
英語の授業が好きだ	94	4.34	.97	94	4.38	.91	-.62	93	.540
英語で先生や友達の話聞くことは楽しい	93	4.11	1.05	93	4.41	.88	-3.81	92	.000
英語で自分のことや調べたことを話すことは楽しい	94	3.99	1.00	94	4.32	1.00	-3.47	93	.001
英語で友達と会話をするのは楽しい	92	4.09	1.08	92	4.34	1.01	-2.45	91	.016

「自分の英語力向上に関する積極性」については、表 4 より、全 3 項目の内、「自分の考えや思いを英語で話せるようになりたい」( $t(93) = -2.13, p < .05$ ) の項目に有意差が見られた。このことより、誕生日について紹介し合うという言語活動の中で、集めた情報の中から紹介する内容を自分で選択させたことや、自分で調べた内容や友達の紹介を聞いたとき、自分の思いに合った言葉を選んで言わせたことがこの積極性を高めたのではないかということがいえる。「英語の文字や単語が読めるようになりたい」( $t(93) = -.51, n. s.$ ) と「英語の文字や単語が書けるようになりたい」( $t(93) = -1.12, n. s.$ ) の項目は有意差が見られなかった。これは、今回の実践授業では、「読むこと」や「書くこと」の活動が少なかったためだと考える。

表 4 自分の英語力向上に対する積極性

質 問	事前			事後			$t$	$df$	$p$
	$N$	$M$	$SD$	$N$	$M$	$SD$			
英語の文字や単語が読めるようになりたい	94	4.51	.86	94	4.55	.88	-.51	93	.614
英語の文字や単語が書けるようになりたい	94	4.53	.79	94	4.63	.79	-1.12	93	.267
自分の考えや思いを英語で話せるようになりたい	94	4.25	1.02	94	4.44	1.01	-2.13	93	.036

「外国及び異文化に対する興味・関心」について表 5 を見てみると、全 3 項目の内、「外国のくらしや文化について知りたい」( $t(93) = -3.25, p < .01$ ) の項目に有意差が見られた。このことより、スモールトークの中で、単元の内容に関連した異文化紹介を行ったことが、外国及び異文化に対する興味・関心を高めたのではないかということがいえる。

「いろいろな国の人と話がしたい」( $t(93) = -.39, n.s.$ )と「日本語と英語の違いについて知りたい」( $t(92) = -.53, n.s.$ )は有意差が見られなかった。「いろいろな国の人と話がしたい」に関しては、今回の実践授業の中で外国の行事について紹介する際、そこで生活する人の様子にまで関心を向けられる内容がなかったためだと考える。また、「日本語と英語の違いについて知りたい」に関しては、子供たちが文字に着目する活動が十分でなかったためだと考える。

表5 外国及び異文化に対する興味・関心

質 問	事前			事後			$t$	$df$	$p$
	$N$	$M$	$SD$	$N$	$M$	$SD$			
いろいろな国の人と話がしたい	94	3.83	1.26	94	3.87	1.31	-.39	93	.697
外国のくらしや文化について知りたい	94	4.01	1.16	94	4.33	1.01	-3.25	93	.002
日本語と英語の違いについて知りたい	93	3.99	1.20	93	4.05	1.16	-.53	92	.596

#### (ウ) 調査のまとめ

調査結果より、二つの成果が得られた。

一つ目は、他者と英語で話したり、英語で話を聞いたりすることの好意性が高まり、英語で自分の考えや思いを話したいという意欲が高まったということである。これは、子供たちが学習過程で、自分の英語力に関する到達度を自覚しながら取り組むことにより、少しずつ自信が持てたことと、今回交流した内容が、自分が調べたことや自分の気持ちについてのものであったことにより、「伝えたいことが伝えられた」、「相手のことが分かった」という達成感を味わうことができたためだと考える。これらのことは、文部科学省が述べる「主体的な学び」や「対話的な学び」の視点を踏まえ、授業の中で効果的に生かすことができた取り組みであったといえる。

二つ目は、外国のくらしや文化に対する興味・関心が高められたことである。これについては、他教科の内容や異文化的な事柄を取り入れたスモールトークを行ったことが関係していると考えられる。スモールトークでは、日本や自分達の習慣と比較ができるような紹介の仕方をしてきた。それにより、指導者が声がけをしなくても自主的に違いや共通点を見つけ出すようになる子もいた。この授業を通して、「比較して物事を見る」という学習の視点を身に付けてきたのではないだろうか。子供たちの中には、違いや共通点だけでなく、それぞれの国の良さにも気づいたり、それぞれの文化が持つ特徴について「どうして?」と考えたりするようになった子もいる。異文化的な事柄を取り入れたことで、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を養い、「対話的な学び」や「深い学び」をより豊かにしていくための見方・考え方を育むこともできたといえる。

ただ、アンケート調査の結果からは、「いろいろな国の人と話がしたい」や「日本語と英語の違いについて知りたい」、それから「読むこと」や「書くこと」に対する積極性については有意差が見られなかった。しかし、自由記述の中には、「外国人の友達を作りたい」や「いろいろな国の人と親しくなりたい」といった記述があった。また、発音や言葉の由来、外国語の書き方などに関して興味を持ち始めている子供たちもいた。今後も、引き続き異文化を紹介したり、日本語と英語とを比較して考えるような活動を取り入れたりしていくことで、効果が見られてくると考える。「読むこと」や「書くこと」に関しては、今回の実践が時間数の関係上、時間を十分に確保することができなかった。実際に自分が読んだり書いたりする体験をしなければ、それに対する意欲への効果は現れないということだろう。しかし、今後は授業時数が70時間になる。「読むこと」と「書くこと」に関しても、発達段階と導入の仕方を考慮しながら効果的な指導を展開していくことで、それぞれの積極性を高めていきたい。

#### 4 まとめ

本研究では、先行研究等を基に「主体的・対話的で深い学び」のある学習内容の開発し、児童の外国語学習に対する意欲についての効果の検証を行ってきた。その結果から、児童の発達段階の観点から、小学校高学年を対象とした外国語科の授業では、他教科の内容や異文化的な事柄を取り入れた展開を工夫することと、自分が知らない情報について他者と交流するというコミュニケーション活動を設定することにより、子供たちを主体的・対話的で深い学びに向かわせることができるといえる。また、今回の調査では「読むこと」や「書くこと」についての有意差は認められなかったが、今後「外国語科」になることで文字を読んだり書いたりする活動も加わり、より多様で深い学びにしていくことが期待できるだろう。それにより、「読むこと」や「書くこと」も含めた意欲の向上ができると考える。

今後の課題としては、以下の二点をあげる。

一つ目は、児童の実態に合わせた、必然性が感じられる課題設定についてである。現在、子供たちは学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、学習したことを生活や社会の課題解決に生かしていくという面に課題があるとされている。児童が自分の将来を想像するとき、もしくは学習の中で自分の普段の生活と重ねながら、実際に英語を使って外国の人やものに接している自分を想像できるような外国語科の授業を展開したい。

二つ目に、学習した語彙や表現の定着、および自分の本当の思いを伝えられる語彙や表現の習得についてである。小学校での外国語の学習においては、知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるわけではないが、実際のコミュニケーションにおいて活用されることを通して獲得していくことが求められる。どのようにして獲得させていくかは、今後さらに研究していかなければならない。また、今回の実践授業では、自分の話に対して、相手から感想を言ってもらえたことが、子供たちの心に大きな喜びを与えたようである。高学年といえ、物事を多角的に捉えることができるようになり、批判的な精神も芽生える時期である。型どおりの表現だけでは、十分に満足できるやり取りができない。英語でのやり取りを成立させるためには、自分の思いに合った言葉を知っていることが必要になる。

#### <参考・引用文献>

- 安達理恵 (2009) 「小学校英語学習者の動機付けの影響要因」『JASTEC 研究紀要』第28号, 43-64
- エリス, R. (1988) 『第二言語習得の基礎』ニューカレントインターナショナル, 96-103
- 岡秀雄・金森強 (編著) (2007) 『小学校英語教育の進め方―「ことばの教育」として―』株式会社成美堂
- 清水美緒・橘川真彦 (2009) 「小学校高学年における学習意欲に影響を及ぼす要因」『宇都宮大学教育学部 教育実践センター紀要』第32号, 117-124
- 樋口忠彦・金森強・國方太司 (2005) 『これからの小学校英語教育―理論と実践―』株式会社研究社
- 藤村宣之 (2005) 子安増生 (編) 『よくわかる認知発達とその支援』株式会社ミネルヴァ書房
- 文部科学省 (2015) 『平成 26 年度「小学校外国語活動実施状況調査」の結果について』  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm)
- 文部科学省 (2017a) 『平成 28 年度 英語教育改善のための英語力調査 (速報版)』  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/02/1382798\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/03/02/1382798_1_1.pdf)
- 文部科学省 (2017b) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)
- 文部科学省 (2017c) 「教育課程全体の改善の基本的な方向性」『初等教育資料』2017 年 No. 951, 2-13